

日本一運動から始まる、「地方競争時代」への挑み。

十年ぐらい前から、「地方の時代」という言葉が頻りに使われてきました。これは地方が主体性をもって自立的な地域づくりを目指し、国に対して協力を求めていく方向であったといえます。

ところが、今日、国の財政も硬直化し、国に対して多くを期待することは困難な状況となっています。一方、社会生活の面でも、量産化されるものより手づくりのものが、また、画一化されたものより個性的で質の高いものが求められるようになってきています。こうした状況下で「地方の時代」は、いよいよ力をつけてきた地域が独自に個性ある優れたものを競い合う「地方の競争の時代」に突入したといえます。

今後、知恵を働かせ、工夫を凝らす地域と、そうでない所とは、五年後、十年後、相当の格差が生じてくることが予想されます。

◇ 「くまもと日本一づくり運動」が掲げている日本一とは、何も量的なものだけを追求するものではありません。たとえ少量であっても、質の良いもの、他に真似のできない独特のものをつくりあげていくという努力目標です。要は、各地域が自発的にその特性を見だし、大きく伸ばすことにより、個性ある地域をつくることに意義があります。

地域のもつ個性は様々であり、地域づくりにもいろいろな方法、手段が考えられます。

大別すれば、
第一に高品質で付加価値の高い製品づくり。
第二に拠点となる観光開発、景観、街並みなど地域デザインに配慮した町づくり。

香

日本一の石段づくり (下益城郡中央町)

■九州の霊山の一つ、西の高野山といわれている金海山大恩教寺釈迦院は、約1200年前、桓武天皇の勅願により、名僧梵善大師によって開基されました。

その後、多くの修験僧や参拝者が往来した山坂が御坂といわれる釈迦院の表参道です。

この由緒ある表参道には数多くの伝説・遺跡が残っています。この素晴らしい文化遺産を更に整備充実し、後世に残そうと、御坂に石段づくりが始まりました。

計画の概要は、釈迦院に至る御坂遊歩道(延長2,900メートル、標高差600メートル)に3000段を越す日本一高い石段を積み上げ、その途中に「ふれあいの広場」、「小鳥ヶ丘」、「紅葉ヶ台」、「展望台」などを設置するというものです。

町では将来、周辺に宿泊施設、スポーツ施設を整備し、観光客を誘致したり、合宿の場として大学・高校の運動部などの利用に供したいと考えています。

先日、この石段づくりの話を伝え聞いた石の名産地・香川県の庵治石組合から石材が寄付されることとなりました。現在1708段まで完成していますが、この中には、中国・福建省の御影石も使われています。

石段づくりの計画が国内外で話題となり、石を通じての親善交流が始まっているのです。



せません。3年前から、町の農協では畜産農家の堆肥をとり入れ、農家に配布しています。農家の中には個人で堆肥を何年も寝かせてから土の中へ入れるという研究熱心な方もみられます。更に、連作障害による肥料のかたよりをなくすため、農協が土壌分析センターを設置して、農家の相談に応じています。

ブランド化の利点は大きいといえます。まず、農家経営が安定するという事です。簡単に言えば、植木でスイカを作れば確実に売れるのです。このことは後継者づくりを容易にしています。農協関係者も「店先で、お客さんに『植木のスイカ、と名指しされるようになって、長年の苦勞が報われます』と語ってくれました。

スイカに、色のついた目印の棒を立てます。こうして、3日置きに色違いの棒が立てられていきます。棒が立てられて約40日経過した後、同色の着果棒ごとに集荷されます。集荷する前には査定会が行われます。ここで、スイカづくりの達人たちが、集荷時期を迎えたスイカの色、味、糖度を吟味し、一律の集荷時期に微妙な調整を加えるのです。着果棒が導入されてからは、1カ月前から出荷計画がたてられるようになったそうです。

10年前、植木のスイカはその出荷量で全国に知れわたるようになりましたが、4、5年前からは特に味を意識するようになったといえます。

これは、消費者の高級品指向が高まるなか、日本一を守ろうとする農家の意欲の表われといえます。その戦略としては土づくりが欠か

味

大量生産から味づくりへ (鹿本郡植木町)

■植木町のスイカは、今では北海道にまで出荷され、日本一の人気を博しています。

昭和40年の農協合併の際、町の特産品を創ろうと、植木町の土壌に適したスイカの大量生産が始まりました。40年代半ばからハウス栽培を導入し、生産高は増加の一途をたどりました。現在、スイカ畑は740ヘクタールにも達しています。

ブランドが確立するまでには、いろいろなアイデアが生まれました。その一つに着果棒があります。従来出荷時期は、個人の勘を頼りに、叩いた時の音などで判断されていました。これを日数の経過で判断する方法として、この着果棒が考案されたのです。まず、各農家で一定の大きさ(直径7センチ)となった

